# 短編『家を壊す』

谷賢一

## 登場人物

鴫田（しぎた）　正成（まさしげ）　６０。「あさひ食堂」店主。兼業農家。埼玉県に避難していた。（市川しんぺー）
朝日　数穂　５５。正成の妻。理由なく家を離れ別居、離婚協議中。（登場しないが、南果歩）
鴫田　博満　２７。鴫田家長男。土木工事会社経営。除染事業で一財産を築いた。（久留飛雄己）
鴫田　夕貴（ゆき）　２６。鴫田家長女。東京でコーヒー店を開業した。（家久来愛実）

**第一場、正成の新居に取材に訪れる人々**

記者１　新聞記者。３０代。（久留飛雄己）
記者２　新聞記者。２０代。（家久来愛実）
記者３　テレビ記者。３６。（佐藤みゆき）
渡辺　５０。正成と古い馴染みの地元新聞記者。相双地区支局長。（東谷英人）

**第二場、夕雨の店「MEGURO COUNTERPOINT CAFÉ」を訪れる客**

店員　３５。（東谷英人）
志田　４０。双葉町出身。（佐藤みゆき）

**第三場、浜辺でキャンプ中の博満を訪れる友人と、博満の妻**

濱田　３１。博満の昔の友人。（東谷英人）
莉沙　２８。博満の妻。（佐藤みゆき）

**第四場、居酒屋「宿六酒場（やどろくおおとら）　大虎」で宴会を繰り広げる博満・夕雨の従兄妹。**

保子（やすこ）　３８。専業主婦。現在いわき市在住。（佐藤みゆき）
弘志（ひろし）　４０。城野建設部長。博満に仕事を紹介した。郡山市在住。（東谷英人）

**第五場、正成の新居に集まる人々**

尾形　４０。おがた法律事務所、所長弁護士。（佐藤みゆき）
中川原　６５。双葉町役場地域振興課長。（東谷英人）

## 舞台

福島県双葉町。ただし劇中では「双葉町」とは明言されず、福島県浜通り地方のどこかの町という印象を与えるに留める。時代は２０２２年１０月１日からの数ヶ月間。

# 第一場　新居に住む

数穂が出ていってしまった空間。どこにでもあるようなシンプルな四人がけのダイニング・テーブル・セットが置かれている。
そこに鴫田正成が入ってくる。右手には、荷物がいっぱいに詰め込まれた大きめのバッグが一つ。左手には椅子を一脚、提げている。テーブルが一つと椅子が四つ集まる。鴫田はバッグをテーブルに置き、椅子の位置を慎重に調整している。

そこへ外から声が聞こえる。

渡辺　あ、いますね。……いましたよ、こっち、こっち。……鴫田さーん、どうもー、おはようございまーす。

記者1　おはようございますー。

記者2　おはようございます。

渡辺　あ、どうもどうもー、ご無沙汰しております、福島民報の渡辺です、どうもどうも、ご無沙汰しまして、どうも……。（記者たちに）こちらが、鴫田さん！　我らが鴫田さんです。

記者2　おー。

記者1　（何となく拍手する）

渡辺　町の有名人！

渡辺　やー、嬉しいなァ、お変わりなく！　……今ちょっと、お時間よろしいですか？　……中、お邪魔しても？

正成　どうぞ。

渡辺　（記者たちに）ほら！　さ、中。

記者1　すみません。

渡辺　（正成に）この度はどうも、ねぇ、いよいよ……あ、これあのご自宅用に、つまらないものですが。……ティッシュです。ティッシュならね、こんなん、いくらあってもいいかなと思いましてね。

記者3　あの、カメラ、回させて頂いても？

渡辺　どうぞどうぞ。

記者3　あ、はい……。

渡辺　いや鴫田さん、朝早く入るっつってんのに見当たんねぇでしょ、だからあっちの……Bの1の人んとこさご挨拶に。もう会われました？　若い人ですよ、まだ、……若くはねぇか、40って言ってたから。

記者1　東京から来た演劇の、作家さんで。

正成　僕もまだ来たばかりで。

記者3　すみません。あの、もし差し支えなければ何か……いよいよ今日から入居ということで、荷物とかを搬入してるところを、撮らせてもらえたらと思うんですが……。

渡辺　図々しいねえ！

記者3　家具でも段ボール箱でも、何でもいいんですが。
正成　……えーっと、
渡辺　ほら、困ってんじゃないの！
記者3　すみません。
渡辺　（正成に）これだから、テレビは。
正成　ああ、いえ……。
渡辺　じゃ、嶋田さん。こうしましょう。車まで戻ってもらうのも何だから、これね、この……バッグと椅子、これ持ってもらって。そんで玄関から入ってきてもらって。
記者3　え。
渡辺　すみません！　パパッと撮っちゃいましょ。ほんのちょっとだけ。ね！
正成　まぁ……。（と言いつつ外に出される）
渡辺　ありがとうございます、どうも。はいはい、ね、こっち、これ持って……（記者3に）一回だけだよ？
記者3　はい……。
渡辺　じゃ嶋田さん、どう？　準備オッケーかな？
正成　はい……。
渡辺　じゃどうぞ。（嶋田が来ないので）……アクション！

**渡辺、手を叩く。正成、きょろきょろ様子を見てから、入ってくる。ドアをくぐる瞬間にフラッシュが炊かれる。正成、部屋に入り、サンダルを脱ぐ。もう一度、バッグをテーブルに置き、慎重に椅子の位置を決める。**

渡辺　じゃそこで、視線、……ちょっと遠くを眺めるような感じで。
正成　……。

**正成、遠くを眺めて、目を細める。**

渡辺　オッケー！　……いやー、よかったですよ。役者だなぁ、嶋田さん！
正成　僕は今、どこを見てたんでしょう？
渡辺　ねぇ。
記者3　どうもありがとうございました。
渡辺　あと、お話少し、よろしいですか？　ちょっとだけ……。
正成　えぇ、まぁ……。
渡辺　すみません、どうも。（記者たちに）さ、誰からでもどうぞ。
記者1　あ、じゃあ、僕から。
渡辺　失礼のないように。
記者1　はい。あの朝早く申し訳ありません。私、福島民報の、ヤシロと申します。
正成　はい。

記者1　長い年月を経て、いよいよ入居……ですが、率直なところ、今の感想というか、お気持ちはいかがでしょう。

正成　……あぁ……。

記者1　……本当に、簡単にで結構ですので。どんなことでも。

正成　んー……？（嬉しそう）

記者1　あぁ。やはり、何年経っても、自分の町に戻れるのは、嬉しい？

正成　……まぁ。（満足げ）

記者1　念願かなっての帰還、やはり感無量……というところでしょうか。

正成　……えぇ、まぁ。

記者1　言葉にならない。

正成　……はい。

記者2　ふるさとの空気は、やっぱり違いますか？

正成　……はぁ。

記者2　申し遅れました、私、郡山の方から来ております、民友のヨコヤマと申しまして。私でも、やっぱり違うなあ、浜の方は……なんて思うくらいですから、もともと住んでらした方からするともう、全然違うのかなーと……。

正成　あー……。

記者2　嶋田さんは、ずっとこちらで……？

渡辺　ずっとよ、ずっと。そりゃもう。少なくとも、俺が生まれたときには店、あったもんね？

正成　はい……。

記者2　となるとやはり、久々のふるさとは違いますか？

正成　……。

渡辺　食堂あさひっつったらねぇ。町のもんみんなお世話になったもんですよ。チャーハン、ナポリタンハンバーグ、二色のソースのオムライス。

記者2　あー。たまらないですね。

渡辺　んまかったのよ？　チャーハンとか焼きそばは正成さんで、オムライスとか洋食系のメニューは奥さんの担当だったのよ。だから、チャーハン頼むと、正成さんが作って、奥さんの数穂さんが運んでくんのね。「お待たせしました、チャーハン大盛り。今日のサービス、煮卵どうぞ。わー何とかさん久しぶりー、痩せましたー？」なんてやってると、厨房から正成さんの怒鳴り声が聞こえてきてね。「おせーぞお！　なーにおしゃべりしてんだー！」「はいー！」なんてやってね。で、逆にオムライス頼むと、数穂シェフが作って、正成さんがヘコヘコ運んできてね。「へいお待ちどう、二色のソースのオムライス、……あら何だ、何とかさんでねーの、いや今度あのお祭りの件でね、商工会議所の連中が相談に行ったと思うんだけんちょ……」なーんて話してっと、今度は厨房から数穂さんが、「この宿六ー！　おっせーぞー！　なーにおしゃべりしてんだー！」「はいー！」なんてやって。

記者2　あー。いいですねえ。何だか……

渡辺　んまかったのよ。安くって。量は多くって。

記者2　となるとやはり、久々のふるさとは、

渡辺　違いますよねぇ、そりゃあ、もう。何もかも。
記者3　よろしいでしょうか。
渡辺　どうぞ。
記者3　テレビミー福島の小田と申します。先ほどはどうもありがとうございました。私からも？
渡辺　どうぞ。
記者3　今日、ご入居されたのは、鴫田さんお一人でしょうか？
正成　え？
記者3　ご家族は？

**短い間。ちょっと、正成のトーンが変わる。ほんのちょっと。**

正成　今日は、私だけです。今日のところは。
記者3　あぁ。
正成　何せ１０年です。「戻れますよ」、いきなりそう言われて、「はい、じゃあ、戻ります」。こうはいきません。子供らも震災のときはまだ中学生・高校生でしたが、仕事があります。別の街に家もあります。息子は去年、結婚もしました。
記者3　今から一緒に住むのは、やはり、
渡辺　おい。
正成　だからね、こうして、椅子を置くんです。
記者3　はい？
正成　鶏が先か、卵が先か。ここの、今日、オープンした住宅……。二〇戸ですか、三〇戸ですか。
渡辺　二十五戸です。来年までに八十戸。
正成　ここも、まだ空っぽ。私と、演劇の変な人以外、誰も住んでない。だけど、これが第一歩なんです。空き家だけど、場所がある。だから帰って来れる。
記者3　はい。
正成　帰る人がいるから、家を作るのか。家があるから、帰れるのか。だから、この椅子も置いたんです。卵が先かもしれないし、鶏が先かもしれない。
……だけどせめて、帰れるようにはしておかないと。人ってのは何故だか、必ず、最後には、ふるさとに帰りたがるようにできてるんです。どうしてでしょう。どうして私たちは、こんなにも、ふるさとに帰りたがるようにできてるんでしょう？
帰れて幸せです。
渡辺　（バッグからコーヒーミルを取り出して）これ、お子さんからですよね？
正成　えぇ。
渡辺　（記者3に）お子さんが今、東京で、コーヒーの専門店やってんです。この豆なんか、ほら、ブラジルじゃないですよ。エルサルバドル。すごいでしょう、コンクールで世界一までとってんですよねぇ？
記者1　うちでも一度記事にさせてもらいました。町が生んだコーヒー世界一。
渡辺　（豆を見ながら）うらやましいなぁ。うちの息子なんか正月も顔出しませんよ。

記者3　じゃあ、いずれ、お子さんたちも戻られたら、ここで……コーヒーを入れたり。
渡辺　お店で出しましょう。食堂あさひで、エルサルバドルの……。
記者3　食堂、再開されるんですか？
正成　いずれはもちろん。
渡辺　本当ですか。
記者3　それじゃあ、奥様もいずれ。
正成　えぇ、もちろん。いずれ。家も残してありますから。
記者2　家というのは……。
渡辺　鴫田さんのご実家でね、一階がさっき言った食堂あさひ、二階にご家族で済んでらして。元々奥さんのご実家だったんですが……。
記者1　あれですよね、駅の東側にある……。
渡辺　そうです、そうです、駅の東側の……。

**音楽が流れる。人々はサイレントでしばらくその続きを演じる。**
**ややあって人々は立ち去っていく。**
**正成一人が残る。**
**しばらくぼーっとした後、もう一度、どこか遠くを眺めるような目線をする。ほとんど泣きそうになっているが、頭をぶんぶんと振り、バッグからワンカップ大関を取り出すが、それは飲まず、紙パックの豆乳を取り出して、ちゅうちゅう飲む。もう一度、泣きそうな目をするが、豆乳を飲み切り、電話をかける。**

正成　ゆーちゃん、どうしてますかー？　こちら、本日ぶじ、えー、入居しました。……お父さん以外、まだ誰も住んでなくて、さっきは新聞とか、テレビとか、取材の人が、……10人以上、集まって、インタビュー攻めでした。まぁ、東京じゃあ見れないかもしれません。……ゆーちゃんの話をしたら、みんな喜んでました。……さっきまでは、取材の人たちで、すごくうるさかったんですが、今は……。……。聞こえますか？　本当に静かです。早く見にきて下さい。町はだいぶ綺麗になりました。

# 第二場　コーヒー屋さん

**志田が店に入ってくる。**

**コーヒーを運んでいる途中の店員（背の高い男性）が、志田に声をかける。**

店員　いらっしゃいませ。お好きな席をどうぞ。

志田　えーっと、じゃあ……。（とカウンターを眺める）

店員　カウンターでよろしいですか？　お二階にテーブル席もございますが。

志田　カウンターで。

店員　どうぞ。

志田　ありがとう。あの、私……。

店員　（カウンターに置いてある豆の皿を示し）こちら、本日の豆の種類です。ご覧になってお待ち下さい。

志田　恐れ入ります。

**店員は立ち去る。**

**志田は、カウンターの前に並べられた、コーヒー豆の入ったガラスシャーレを見比べている。**

**店の奥でカップなどを拭きながら、夕貴がその様子を見ている。**

志田　エチオピア、ゲデブ……、ウォルカ、サカロ……。ニグセ、ゲメダ……。

夕貴　だめだ全然わからん。

志田　……よろしければご案内を？

夕貴　頼めますー？

志田　何か、お好みがあれば。

夕貴　お好みって？

志田　酸味とか、苦味とか、しっかりしたものがいいとかスッキリめがいいとか……。

夕貴　普段はスタバとか、コンビニのコーヒーとか。

志田　はい。

夕貴　あれすら飲まない。スーパーで一番安いインスタントコーヒー買ってがぶがぶ飲んでる。場違いよねえ、あたし？

志田　いえ！　私も、そうでした。ちょっと前まで。

夕貴　だよねー？　わっかんないよねー、正直？

志田　最初はそうですね。

夕貴　だからさ、あたしどうせよくわかんないから、せっかくだし何か、珍しい、わっかりやすいものがいいものがいいかな！

志田　それでしたら本日、……こちらなんかオススメですね。

**と、夕貴は豆の入ったガラスシャーレを前に出す。**

夕貴　エルサルバドル産のパカマラ種です。酸味もありますがかなりスッキリしていて飲みやすいですし、香りがとても華やかでフルーティだから、えー、これがコーヒーの香り？なんて、びっくりされる方が多いですね。

志田　うわ！　一杯１４００円もするの！

夕貴　本日お出ししてる豆の中では一番高いですね。

志田　安い店ならうな丼くらい食べれるじゃん。

夕貴　ハンドドリップでしたらこちらのエチオピアからこちらのケニアまでが７００円、こちらが８００円、９００円。マシンドリップなら４００円からご用意がございます。

志田　いいよいいよ、せっかく来たんだから。どうせならその一番高いやつちょうだい。サルバドール何とか。

夕貴　エルサルバドル。

志田　うん。

夕貴　うちは出してませんが、一杯５０００円なんてのもありますよ。

志田　高い店でうな重食べれるじゃん。

夕貴　神田にあるグリッチって店で飲めます。今も出してるのかな。

**夕貴はコーヒーの準備を始める。**

志田　……何ですか、スペシャルティコーヒーって？　ぶっちゃけ……。

夕貴　あー……。

志田　おばさんよくわかんなくて。要はすごいコーヒー？

夕貴　そうです。すごいコーヒーです。

志田　どこが？

夕貴　人や団体によって定義は様々なんですが、……一言で言うと、徹底的に品質管理されたコーヒーのことです。

志田　ふむ。

夕貴　その品質管理の際によく使われる基準や概念がいくつかあります。例えばフロム・シード・トゥ・カップ。畑に植える前の種、つまりシードの段階から、飲む直前、つまりカップまで、完璧に品質を管理する。それから、トレーサビリティ。追跡可能性とか訳されますけど、例えばこの豆は、南米のエルサルバドルの、どの県の、どの農場で、誰が、いつ作ったのか、完璧にさかのぼれます。

志田　あれだ、野菜買うとき、農家のおじさんの顔が貼ってあるやつ。

夕貴　それと同じです。あとはサステナビリティとか、シングル・オリジン、サードウェーブ……

志田　コーヒーにもサステナビリティとかあんの？　ＳＤＧｓみたいなこと？

夕貴　はい。環境への配慮はもちろん、重要なのはフェアトレードです。いくら美味しいコーヒーが採れても、安いお金で買い叩いて農園が潰れちゃったらいずれ飲めなくなってしまう。なので品質に見合った適正な価格で取り引きし、サステナビリティすなわち持続可能性を維

持する。これも重要な評価基準です。
志田　すごい。……ここのご店主は、何か、世界一とってんですよね？
夕貴　……はい、ワールド・ブリュワーズ・カップっていう世界大会で、一応、一位を。
志田　すごい。日本人初？
夕貴　あ、いえ、２０１６年に日本人がとってます。２０１８年の受賞者も、今の国籍はスイスですが元は日本出身で……。
志田　ご店主、福島出身なんだよね。私も福島なの。
夕貴　……できました。
志田　え？
夕貴　こちらです。どうぞ。

**志田はちょっと困った顔をする。**

志田　あー……。……あの、ごめんなさい。できれば、その……。
夕貴　はい。
志田　私、ここのご店主のコーヒーが飲みたくて来たのね。そのために、ここまで。だから……。
　　うん、もう一杯頼もうかな。ごめんなさいね、先に言わなくて。
夕貴　えっと……。

**変な間が二人の間に流れる。**
**夕貴は、一度振り返って志田に背を向け、息を吐く。**
**それからもう一度振り返る。平然とした顔をしている。**

志田　え。もしかして、あなた？
夕貴　はい。
志田　あなたがご店主？
夕貴　はい。
志田　……さっきの男の人は？
夕貴　……立川さんのことですかね？　背の高い？
志田　はい。
夕貴　彼、アルバイトです。
志田　……あ、ごめんなさい私、すっかり勘違いして！
夕貴　私がアルバイトだと思った。
志田　ごめんなさい！　でも……あれ？　確かに私、食堂あさひの息子さんが東京でコーヒー屋やってるって……。
夕貴　あー、はい。あるんですよ、たまに。
志田　と言うと……？
夕貴　例えばほら、板前とか職人っていうと、なぜか男の人でイメージする人多いですよね。それ

と同じで、コーヒーの抽出士なんていうと男だろうと思うんでしょうね。「嶋田さんとこのお子さん」としか言ってないのに、どこかで息子さんって変換されて。おまけに一応、賞なんかとってると、余計に？

志田　何だかごめんなさい。

夕貴　いえいえ。

志田　……でも、そんなら、ウェブサイトにはっきり書いときゃいいのに。

夕貴　見て下さったんですか？

志田　見たけど。何も書いてないでしょ、あのウェブサイト。

夕貴　すみません。

志田　出身地のこととかも。伏せてるの？　やっぱり……。

夕貴　……あの。

志田　はい。

夕貴　そろそろ……冷めちゃうので、飲んで頂いた方が。

**間。**

志田　ごめんなさいね。頂きます。……えーっと……。

夕貴　エルサルバドルの、パカマラという種類の豆です。焙煎もかなり浅煎りで、フルーティーな味わいが特徴です。飲み始めは柑橘系、オレンジのような香り、途中からチョコレートのような甘味があって、後味はウーロン茶みたいにスッキリ感じられるんじゃないかと思います。

志田　オレンジとチョコレートとウーロン茶混ぜたらめちゃくちゃ不味そうだけど。

夕貴　順番に来ますんで。大丈夫です。

志田　飲み始めはオレンジのような香り？

夕貴　はい。

志田　コーヒーでオレンジのような香りなんて、……

**志田、飲む。**

志田　はー。（オレンジの香り）するー！

夕貴　でしょう？

志田　……（一口飲んで）おーすごい。……（また一口飲んで）はーすごい。

夕貴　ありがとうございます。

志田　（もう一口飲んで）んー、すごい。チョコレートだわー。はー。

夕貴　初めて飲むと驚きますよね。私も大好きな豆で。

志田　こりゃすごいわ。

**志田はコーヒーを飲んでいる。**

夕貴　ウェブサイトには、あえて何も書いてないんです。なるべくコーヒーと関係ない情報を入れたくないんです。例えば……女でコーヒー抽出士やってるなんて言うと、なめられることもありますけど、逆に変に、チヤホヤされちゃうこともあって。

志田　あー……。

夕貴　変な取材もくるし、変な質問もくるし、ニュースの見出しも「日本人女性バリスタ、世界一に……」。嫌じゃないですか、関係ない属性でラベル貼られるの。

志田　それは、もちろんわかるけど。でもそれで福島出身ってことも伏せてるの？

夕貴　伏せてるわけじゃないですけど、さすがにもう……いや全く風評被害なくなったってことはないじゃないですか、うちは食堂の他にコメも兼業でやってたんでわかりますけど、いまだにアンケート取ると農作物買うときは避けるって意見が１０％くらいありますよね。

志田　もうちょい下がった。令和３年の調査で８・１％。

夕貴　……はい、でもうちはコーヒーですから、風評被害ってのはほとんどなくて。むしろ逆に、「福島なんだ。大変だったでしょ。応援するよ」、「福島出身なのに世界一はすごい、よく頑張ったね」……ってこれ、よく考えると、どうです？

志田　どうって。

夕貴　おかしくないですか？

志田　うん……。

夕貴　要は、私が淹れたコーヒーが、……うまく言えないな。味とか内容じゃなくて、その……。とにかくただ、シンプルに、コーヒーで評価してもらいたくて。

**間。**

志田　なるほどねえ。

夕貴　はい。

志田　コーヒーの産地とは違うんだ？

夕貴　……え？

志田　だって、すごいこだわってるでしょう。エルサルバドル。トレーサビリティ。

夕貴　コーヒーは……育成環境、温度や気候はもちろん、土壌とか、雨量とか、標高とか……どこで育ったかで全く味が変わりますから。

志田　なるほど。

夕貴　はい。

志田　でも私は……私は結構地元とか、家とか、両親とかの影響、ある方だなと思うけど。

夕貴　そうですか。

志田　今は東京に住んでるけど。あの町で育ったから今の私がある。

夕貴　私は、そうは思わないんです。むしろ、出身とか性別とか、自分の淹れるコーヒーに余計なラベルを貼りたくない。

志田　もちろん。それもわかります。だけど、……ごめんなさいね。私がこの店に興味を持ったの

は、正直、鴫田さんちのお子さんがやってるって聞いたからで……。

夕貴　それはいいんです。入り口はもちろん、何でも。

志田　でもね、ほんと、正直、ラベルとかフィルターとかあったけど、飲んだらもう、そう言うのはなくなった。すごくおいしかったです。

夕貴　ありがとうございます。

志田　こちらこそ。

夕貴　……父のこと、ご存知なんですか？

志田　……いえ、事故前は。でも慰謝料裁判の原告団で一緒だったから。ちょっと、有名人だったでしょ、お父さん。

夕貴　（急に頭を下げて）どうもすみません。

志田　あーいえいえ。私は好きだったから、大丈夫。いなきゃダメよ、ああいう人も。確かにね、突然すごい剣幕で怒り出すから最初はびっくりしたけど……。よくもまぁあんなテンションで怒り続けられるよねえ。

夕貴　それが……。

志田　何？

夕貴　……いろんな人からその話されるんですけど。でも私、わからないんです。うちでもお店でも、大きな声出すところなんて、見たことなかったので。一度も……。

志田　……え？　……あの、鴫田さんが？

夕貴　……。

志田　家では一度も、大きな声出すところを見たことがなかった。

夕貴　……。（頷く）

**ティロリロリン……と何かのアラームが鳴る。**

**夕貴は音に気付き、志田に目配せして、レジの端末の表示を確認してから手元で何か準備を始める。それを見て志田も、モバイルオーダーなのかウーバーイーツなのか、何か仕事が始まったらしいことを感じ取る。**

**志田はコーヒーを飲み干して、腰を浮かす。**

志田　それじゃあ、あの、お会計……。

夕貴　ありがとうございます。

志田　（店内の表示を見て）ＳＵＩＣＡでお願いします。

夕貴　かしこまりました。……こちら、光ましたらタッチの方お願いします。

志田　（支払いを進めながら）最後にちょっとご挨拶だけ。わたくし実はこう言うものでして……。（と名刺を渡す。夕貴は名刺を見る。志田は名刺の肩書きの文字列を指さしながら）ちょっ……とこれこの、肩書きが長くてウンザリしちゃうと思うんですけど。要は復興庁と経産省、あと県や都の後援を受けて、丸ビルとか六本木ヒルズとか国際展示場とかで時々、福島県の食品見本市なんかをやってるんですね。

夕貴　はい。

志田　果物、お酒、お菓子、他にも色々出してるんですけど、コーヒーってのはなかったもんだから、ぜひ……と思ったんですけど。いかがでしょう。

夕貴　……。

志田　……ですよね。どうも、ありがとうございました。

夕貴　すみません。

志田　いいんです。あの、もし気が変わったら、メールでもお電話でもご連絡下さい。どうもありがとう、ごちそうさま。

夕貴　ありがとうございました。

**志田は立ち去る……が、戻ってくる。**

志田　（名刺の裏にボールペンで何か書き）……一日出店して頂くだけで、最低でも……これくらいはお支払いできるかと思うんですが。

夕貴　……ありがとうございます。でも……。

志田　失礼しました。……本当においしかったです。色々、ごめんなさい！　……頑張ってね！

**志田は立ち去る。**

**夕貴は何となく、ちょっと遠くを見る。**

**ちょうどその時、別の空間で、正成も顔を上げた。そして正成は電話をかける。**

**別の空間にいる博満が電話に気づくが、取らない。機械音声が流れて、正成は留守番電話に向かって話す。**

正成　おい。……帰ってきてるんだろう。何でうちに来ないんだ。どこ泊まってるんだ。うちに来なさい、遠慮なんかしないで。……布団もあるし、歯ブラシも買ってあるぞ。奥さんの分も……。お前、役場のカンノさんに、俺の話、したんだってな？　知ってるんだよ、全部。バカにするんじゃないよ。……いいから帰ってきなさい。大丈夫だから。

# 第三場　キャンプ

**浜辺で、大雨である。タープが一張り、張られている（可能ならテントも張られている）。その下で、博満がローチェアに座り、焚き火の火をいじりながら本を読んでいる。灯油ランタン（光量次第では圧力式のものでもいいかもしれない）の光が、博満の顔を横から照らしている。**

**傘を差し、懐中電灯を持った濱田が現れる。**

濱田　何してんの、お兄さん。

博満　……。

濱田　……ここ立入禁止区域ですよ。どっから入ったの。

博満　どっからでも入れるんですよ。（手で高さを示して）こんなフェンスがあるだけですから。

濱田　念のため、身分証……。

博満　あの苗木、あれ全部防潮林になるんですって。そのフェンスから向こうは全部汚染土の仮置き場、中間貯蔵エリア。

濱田　お兄さーん。大丈夫ですかー？

博満　（立ち上がり）ここもね！　元はキャンプ場だったの！　だから出て行く道理はねぇの！　なんだ、おめら！　おめが出てけ！

濱田　（少し笑って）やめろ、やめろ。本当に警察来っぞ……。

博満　（大声で）バッカヤロー！

濱田　やめろって……。

**間。**

**博満は椅子に座る。濱田に椅子を勧める。**

**だが濱田は、立っている。**

博満　誰も来ませんよ。警察署どころか、交番もないんですから。おー……（い）。

濱田　（博満を止めて）だから、やめろ。パトロールの車は回ってんのよ、結構。

博満　イノシシとか出るからですか？　サルとか？

濱田　もっと危険な動物がうろついてんの。

博満　クマ？

濱田　人間。お前みたいにフェンスくぐって、解体前の家ん中入ってって泥棒してんだと。避難指示解除んなってまた増えてるらしいよ。

博満　ちょくちょく来てんですか？

濱田　たまに。家、壊すことにしたから、お袋の付き添いで。

博満　決めたんですか？

濱田　うん。でも、ねばってんだよねー。「やっぱり壊さないでおくわけにはいかんかねえ？」「とっとくわけにはいかんかねえ？」「だめだよ、母さん。もうハンコ押しただろ」「でもねえ」。

博満　ずーっとこれ。……お前んちはどうすんの、もうそろそろ決めないといけないんでしょ？
濱田　来年の夏まで。
博満　それまでに決めないと、どうなるの？
濱田　それまでに決めれば取り壊しのお金が出る、それを超えたら出ない。それだけです。
博満　お前んちは無事？
濱田　無事なわけないですよ。他んちと一緒です、イノシシとかタヌキにやられて。寝室の畳突き抜けてタケノコ生えてたらしいですよ。引っこ抜いてよく水に晒して茶碗蒸しにしたって言ってましたけど。
博満　親父さん？
濱田　もちろん。お袋はそんなことしません。
博満　親父さん、新しくできた集合住宅入ったんでしょ。町営の。
濱田　はい。
博満　ニュースで見たよ。ヒーローインタビュー。
濱田　えぇ。
博満　何でお前はそこ帰んないの？
濱田

**間。**

濱田　何してんの、お兄さん。こんな大雨の日に。浜辺でわざわざテント張って。頭おかしいぞ。
博満　自分、キャンプ好きなんで。
濱田　帰りたくないの。
博満　テレビで見ませんでした？　一人なのに、３ＬＤＫ借りて。リビングに、四人掛けのテーブル置いて。頭おかしいのは親父の方でしょ。
濱田　いずれは、家族一緒に……みたいな話だったけど。
博満　俺は戻りません。お袋とは全く連絡取れないし。妹も、東京に自分の店構えたばっかりですから、無理ですよ。誰も戻りません。……そのことが、わかってないはずないのに、帰ってくる場所を残しておきたいなんて言って、待ってる。……何かね、嫌がらせされてるみたいな気持ちになるんですよ、こっちとしては。帰ってこないことを、責められてるような……。
濱田　まぁなぁ。
博満　待つってのは、一種の呪いですよ。……ほらあの、待つわいつまでも私待つわ……みたいな歌あったでしょう、昭和の歌で。
濱田　たとえあなたが振り向いて、
博満　言わないで下さい。あの歌すげー怖いじゃないですか。
濱田　そうかな。
博満　怖いっす。
濱田　たとえあなたが振り向いて、
博満　やめて下さい。……一方的に、待たれてる。ずっと。怖いですよ。
濱田　お母さんはどしたの。

博満　何もわかんないんです。ある日突然、出てった。ほんとに身の回りのものだけ持って。それだけです。俺は携帯は繋がるんですが……親父からの電話は出てもくれないらしくって。

濱田　何で。

博満　だからわかんないんです。……まぁ親父が避難先で、震災うつのひどいやつにかかってた時期があって、まぁ苦労したんですよ。僕たちみんな。だから分からんでもないんですが。

濱田　あのあさひのおかみさんに限って、そんなことあるかねえ。「バカヤロー、しっかりしろ、この、ダメ亭主ー！」とか、やってそうだけど。

博満　よく泣いてました。電話越しに。

濱田　あちゃー……。お前んちもかよ……。

博満　急に地震が来て、（海の方を見て）その後すぐ津波が来た。あっちの方、遠……くから……。店のすぐ目の前まで水が来た。親父はそれを見てる。遺体も、何体も。その光景が脳裏にこびりついてるから夜は眠れない。昼間はいつまた揺れが来るかと思って眠れない。冷や汗たらたら流しながら、同じ新聞記事ずーっと読んでる。ずーっと。

それからその後避難先で、今度は放射能が怖くなって、家を全部、暗幕、黒い布ですっぽり囲んだんですよ。塀から壁から天井から、全部、黒い布で。

濱田　（笑いながら）まじで？

博満　異常な光景でした。住宅街の中に突然、真っ黒い布で覆われた塊が出てくるんですから。

濱田　黒い布って、そんなの、放射能に効果なんてあるわけないじゃない。

博満　もちろんそう説得しました。でも少しは違うだろ、少しは効果あるだろって譲らない。家に上がる人はみんな服脱がされてシャワー浴びせられる。お客はもちろん、俺たちもみんな。

濱田　そんな人が、よくもまぁいの一番に町に戻ったもんだね。

博満　（笑いながら）それはもう、簡単ですよ。あの黒い布は、俺と妹と、お袋のためにだけ、張ってたんです。自分のためじゃなく。

濱田　……それは、笑えねぇなぁ、俺は。……じゃ家族の誰かが家に戻ったらまた暗幕張るかな。

博満　誰も戻りませんよ。少なくともあの家には。

濱田　そうか。

博満　（大声で）誰が戻るかコノ、バカヤロー！

濱田　やめろって。

**そこへ莉沙が帰ってくる。軽く会釈をして、タープ内の椅子に座る。**

濱田　あ。

博満　妻です。

濱田　お邪魔してます。……この挨拶、合ってる？

博満　あの。……（紙を渡して）これ、どうぞ。

濱田　ん？

博満　本日の資料です。読めますか？

濱田　あぁ……。

博満　それでは表紙から一枚、おめくり頂いて、２ページ、現状分析から。

**間。**

博満　浜通りエリア各地方、人口はどこも大体、震災前の１０分の１以下です。浪江町は元２万人いたのが約１５００人。大熊は元１万人いたのが約１０００人。富岡は１万６０００人いたのが今は１５００人。双葉町は８０００人いたのが、現在４０人。最新の数値です。しかもどこも人口の半分くらいは除染や廃炉の作業員ですから、いずれ出ていってしまう。残りの半分どころか大半は高齢者で、若い人はほとんどいない。

もう一枚、おめくり頂いて、今後の展望。農業はどうか？　コメ、畜産、その他、わざわざここでやるメリットはほとんどないですよね。実際、うちの隣近所の農家は大半、茨城や山形・新潟に移っちゃいました。工業はどうか？　土地を安く誘致するなど頑張ってますが、どこも厳しい。商業、これは問題外です。人口１５００人の町じゃショッピングモール一つ維持するのがギリギリ。そもそも日本全体が少子高齢化でゆっくり衰退している中、この地域だけ脅威のＶ字回復なんてのはあり得ない。

誰もはっきりとは言わないし、僕も人前じゃこんなこと言いませんが、あえて言うと、望みなしです。町の中でも、あの辺りの家は全部壊して、地域丸ごと国に買い取ってもらって、核のゴミの最終処分場にしてしまおう。なんていう人もいます。（遠くを指さして）あの辺りの中間貯蔵施設にある汚染土も、２０４５年には必ず県外に出すって言ってますが、じゃあどこに持ち込むのか。どこの県が手を上げてくれるのか。それとも東京都が引き取ってくれるか？　東京電力の起こした事故なんだから。もちろんそうはいかない。そんならこの町は核のゴミ捨て場にして、高値で国に買い取ってもらおう。２ちゃんねるのひろゆきが言ってるんじゃないですよ。町のじっじばっぱが言ってるんです。

濱田　だけど、それは、あんまりじゃないですか。

博満　……うん。

濱田　そこで。もう一枚おめくり頂いて。……今、こんな案が、出てきました。

博満　……はー……。

濱田　しかもこれは、そこまで荒唐無稽な話でもないんです。

博満　……ふむ。

濱田　広大な土地がある。例えばそこに、大きな映画の撮影スタジオを作る。ハリウッドだって元は土地の安い田舎を映画村にしたことがきっかけです。

演劇とかダンス、音楽、美術のアーティストも移住を始めています。Chim↑Pom とか飴屋法水さんがやってる現代美術の展示で面白いのがありました。帰還困難区域、立入制限区域内に美術作品を展示する。要は、誰も見れない美術作品です。立入制限が解除されない限り。土地も建物もあまり活用のチャンスがない。ならば人口が戻るまで、町全体を一つの大きな

美術館に見立てて……映画、演劇、美術、アートとカルチャーで盛り上げる。実際、南相馬市なんかは、芥川賞作家の柳美里が移住してセレクトショップ本屋と劇場を建てたり、若い酒職人たちがビールやワインなど洋酒の技術を使って全く新しい日本酒造りを始めたり、明らかに新しいムーブメントが起きています。

そこで、5ページ目。

**間。**

博満　どうですかね？

濱田　……道理には叶ってるね。お前んちの一階、食堂部分はカフェと作品展示エリアにして、二階の住居をレジデンス、アーティストの宿泊拠点にする。田んぼや納屋はスタジオ、アトリエとして活用。ＡＩＲ、文化拠点としてリフォーム、再活用する。

博満　誰も見れない美術作品があることで、東京や海外の人がこの町のことを思い出す。まだ人が入れない場所があって、家に帰れない人がいることを想像する。アートなら少ない投資で、情報発信と誘客ができる。町の関係人口、交流人口が増える。……どうでしょう。東京のアート界隈の文脈で言えば、どんなリアクションがありえるでしょうか。

濱田　……さっきハリウッドの話が出たけど。カンヌだってフランスのはじっこ、海沿いの小さな町で、人口も確か五、六万人の小さな町だ。でも世界中のスターが集まって世界中で話題になってる。世界最大の演劇祭の一つ、アヴィニョンも何もない田舎町だし、日本で一番の国際芸術祭は直島とか小豆島、瀬戸内海の小さな島でやってる。それから合併前のベルリン、東ドイツでは、共産主義で経済が大失敗してもぬけの殻になってたんだけど、その空き家をアーティストたちに安く貸したことで、今じゃ世界有数の文化都市に成長した。

博満　はい。

濱田　だからコンセプトはいい。めちゃくちゃ芯食ってる。でも……無理だと思う。この町じゃ。

博満　……どうしてでしょう。

**間**

濱田　親父さんにはこの話、したの？　もう。

博満　まだです。

濱田　話したら、どういうリアクションだと思う。

博満　……なんだ、おめ、突然わげのわがらねぇ話しくさってこの。アートだのゲージュツだの、おらわかんね。そんなもんでおめそう簡単にこんな田舎、うまくいくわけねぇべした。ほんな、これっぱかし、ちょこっとアートだの何だのやったとこで、ほんで東京だの外国だのからお客がわんさか来んなら苦労ねえよ。夢みでなこど言ってねぇで、働け！

濱田　だろ？　まぁ高齢者の反応はみんなそんなもんだろ。……なんだそれ、わがんね、おらには、こんな田舎……。まぁ全員とは言わねぇけど。でも、現実的に、住民の大半が高齢者のこの町で、そういう……若者とか未来に投資する選択ができるかな？

博満　……。
濱田　行政は応援してくれてんの。
博満　町も県も国も、若い人の取り組みを応援したいと言ってくれてます。……だけど、まぁ腰が重くて。口先ばっか。メール一通送っても一週間も返事がなくて、催促したら「各方面と協議中でして」とか、何とか。
濱田　そうだ。それが福島だ。極端にシャイで、控え目で、引っ込み思案でさ。さっき俺もお前も「こんな田舎」って自然と言っただろ。「こんな田舎」なんてへりくだってたら観光客も来るわけねぇよ。「うちは果物もお酒もおいしくってねー！」「ぜひ来てねー！」自信満々に言えるか？
博満　言えますよ。
濱田　言ってみろ。
博満　うちは果物もお酒も美味しいよ！
濱田　りんごは青森より美味しいよ！
博満　りんごは青森、と、同じくらい美味しいよ！
濱田　おい。
博満　いや、個人的にはウチが一番だと思いますけど、それは個人の意見で……。
濱田　梨もぶどうも山梨より美味しいよ！
博満　梨もぶどうも、……いや先輩、山梨サンにはちょっと、
濱田　謙虚になるなよ！　傲慢になれよ。
博満　それができないから、アートで人を……。
濱田　まだそんなに多くはないとは言え、アーティスト・イン・レジデンスだの文化芸術で地域振興だのなんてのは日本中あちこちでやってんだ。優れたアーティストを呼び込みたかったら、うちはいい町です、魅力的な町です、そして芸術を応援しています。そういうメッセージを自治体一丸となって出さないといけない。謙虚なだけじゃダメだ。
そしてそれを、そのことを、お前の親父さんのような人にこそ、わかってもらわなきゃダメなんだ。現状維持じゃダメなんだ。昔のような町に戻りたいじゃダメなんだ。新しい何かを始める。しかも、そこそこ面白いものやことじゃなくて、日本一、世界一のクオリティでやらなきゃダメなんだ。日本一、世界一のクオリティでやれば、確かにここは、ハリウッドにもカンヌにも、アヴィニョンにもなれるよ。
博満　はい。
濱田　だからまずは親父さん説得して来いよ。自分の親父も説得できない奴が今後、行政だのアーティストだの、面倒な生き物を説得できるか。さらに面倒な観客、オーディエンスを説得できるか。

**間。**

博満　可能性はある。幸か不幸かこの町は、トーキョー、キョート、ヒロシマ、ナガサキなんかと並んで、国際的に有名になりました。来てみたい人や、関わりたい人は多い。

濱田　そりゃそうだよ、でも残念ながら、もう１１年半経った。被災地だ、ってだけじゃ人は来ない。広島や長崎が、カタカナのヒロシマ・ナガサキとして世界に知られるようになったのは、あの町の人たちの強い覚悟があったからだ。あそこだって壮絶な差別を受けてたんだ、５０年とか６０年前は。でも核の街として、全世界に呼びかけ、悲劇を知っているからこそ、世界平和を訴える。……すごいんだぞ、あれ。忘れようとしなかったんだ。とんでもねぇ街なんだよな、あそこは……。

博満　でもお前は言えないだろ、「ここは原発事故のあった町です。だからぜひ観に来て下さい、この町を」とは。……もしそれが言えたら、山梨より桃がうまいとか言わなくても戦える。先輩はもう東京の人だからそんなことが言えるんですよ。

濱田　お前だって郡山じゃねぇか。

博満　そうですよ。だから、やってんですよ、こういうことも。俺は町を捨てたって負い目がある、だから、何か……、何とかしたい、そう思ってやってんです。

濱田　捨てたなんて思うなよ。

博満　そうですね。

濱田　そんな考え方してると、みんなつらくなるよ。

博満　そうですけど。

濱田　ま、実家帰って、親父さんと酒でも飲んでこいよ。そこからだよ。……さっきからあっちの方、チラチラ光ってない？

博満　警察かな。

濱田　雨も止んだし、帰るよ。また連絡して。相談ならいつでも乗るよ。

博満　ほんとですか。

濱田　実際さ、東京でも京都でも、福島のこと気にしてる作家とかアーティストってすごい多いからね。地元をちゃんと口説いたら、連絡くれれば、いくらでも人は紹介するよ。

博満　ありがとうございます。

濱田　（莉沙に）どうも、お邪魔しました。

**濱田は立ち去る。**

莉沙　お邪魔しました。って、ここ、うちじゃねぇって。

（博満に）落ち込むなよ。成功じゃん。東京のキュレーターが興味持ってくれたんだから。

（本を示して）この本誰の本。

博満　……イスラエルの詩人の本。

莉沙　（ページをめくって）

我が祖国、美しく貧しい大地、

女王は家を持たず、王は王冠を持たない

春の日は年に七日だけ

それ以外すべて雨と寒さ

でもその七日間は薔薇が咲き誇り、
その七日間は朝露が朝日に輝き、
その七日間は窓を開けて、
哀れな祖国の民は街角に立ち、
青ざめた顔を上げて、光に目をやる
哀れな祖国の民も今は幸せ

町から町へ、国から国へ、
私はさまよう、歌を一曲、オルゴールを一つ携えて
貧しく痩せた、偉大なる、あなたの国の物語を語り継ぐために

---

イスラエルの国民的詩人リア・ゴールドバーグ（1911-1970）の詩『我が最愛の大地（My Beloved Land）』から引用。翻訳は拙訳。

# 第四場　酒場　大虎

**居酒屋のお座敷。数穂（５５）の兄（６５）の長男である弘志（４０）と、正成（６０）の姉（６２）の二女である保子（３８）が飲んでいる。博満の席に荷物と飲み物も置いてあるが、本人の姿は見えない。そこに夕貴が入ってくる**

弘志　あ。おーい、こっちこっち、夕貴ちゃん！　なーんだおめ、たーまげたなぁ、おーきくなってー、コノヤロ！　おめ、こーんなちっちゃかったんだぞー。こーんな。なぁ？

保子　まぁまぁ座っせ座っせ。駆けつけ一杯、ビールでいい？　なんて、もう注いじゃったけど！

弘志　ほれ、これメニュー。好きなもん頼め。ったくおめ、ほっせぇなぁ、やんなっちまぁ。ちゃんとおまんま食ってんのか！

保子　ここ何頼んでもバカみたいに量多いから気ぃつけてね。あ、弘志くん。（とビールを注ぐ）

弘志　背ぇばっか高くなって。（胸を見て）果物の出来は、まだこれからか。

保子　（弘志をぶっ叩いて）ダメ！　絶対ダメよ、そういうの！　コンプライアンス！

弘志　しかしまぁ、ハー、覚えてっか、オメ小せえとき、あんころもち喉さ引っ掛けて、顔まっつぁおんなって、死にそうになってナァ。

保子　（ゲラゲラ笑って）あったあった。

弘志　ほんで数穂姉ちゃんがおめのことこう逆さ吊りにして背中バンバン叩いてナァ、正成さんが「やめろ、そんな強く叩いたら背骨折れっぞ！」つって止めんだけど、数穂姉ちゃんが傑作でな、「背骨の一本や二本折れたって、窒息するよりマシでしょ！」、ほんでバンバンバン！　よ。ハー。背骨は一本しかねぇっつの。

保子　東京はどう？　彼氏いんの？　今いくつだっけ夕貴ちゃん、２３、４？

弘志　おめと夕貴ちゃんと干支一緒だったっぺな、ネズミだばい。

保子　んだ！　じゃ何かい、あんたもう２６？　じゃあもうぐずぐずしてらんねぇなぁ、早く相手探さねぇと。弘志くんの会社の若い子で誰かいいのいねぇの、紹介したげて。

弘志　バカこのおめ、今どきはナ、別に結婚なんかしねぐったっていいの、東京では。

保子　わがってる、言われなぐだって、んなごど。

**気がつくと博満が座敷の戸口に立っている。**

**気配に気づいて、弘志はびっくりする。**

弘志　なんだ、おめ、バカヤロウ！　びっくりさせんな、いるならいるっつぇ！

保子　ビビりすぎ。

弘志　長かったなおめ、ションベンでねぐてウンコか。

保子　汚ねぇ話やめて。はい、どーぞ。（とビールを注ぐ）博満くんもねぇ、結婚おめでとう。もう一年半？　順調？　赤ちゃんはまだ？

弘志　ガッハッハッハ！（なぜ笑ってるのかはよくわからない）

保子　ちゃんと頑張ってる、毎晩？

弘志　やめろ、おめ！　セグハラだぞ、セグハラ！　コンプライアンス！
保子　だめだよー、奥さん美人なんだから、ほったらかしにしてっと浮気されちゃうよ？　子供の作り方だったら弘志くんが詳しいから。
弘志　バカこの、うちは普通。四人しかいねぇんだから。
保子　何言ってんのー。六人でしょー？
弘志　やめろぉ、その話は！
保子　前の奥さんとも二人作ってっから。
弘志　接近禁止命令！
保子　この犯罪者！　反省しろ！　あ、弘志くん、空いてるよ。（とビールを注ぐ）
弘志　さてここで、保子オバサンからご報告があります！　よっ！
保子　え、今？
弘志　ほれ、飲め、おめも。（とビールを注ぐ）
保子　えー。あー。本日は、お日柄もよく。マイクチェック、マイクチェック。
弘志　バカこの、早く言え！
保子　実はうち、えー大変お恥ずかしいんですが、……五人目が！　できちゃいました！
弘志　おー！（と盛り上げる）誰の子だ、あーん？　タケヒロさんの子で間違いねぇのか！
保子　多分ね。
弘志　ハー、やだこと、まいっちま。予定日は？　いつ？
保子　来年の七月でーす。ピースピース。
弘志　七月！　あんだ、おめんちはみんな七月でねーの、ソラもノアもミアもココアも、
保子　そうなの！
弘志　秋にだけやってんでねぇのか、おめどこの夫婦は！
保子　ごせやげる！　あやまっちま！　春も夏も冬もやってるわ！　あ、弘志くん空いてるよ。（とビールを注ぎ）んだこっちゃ、こうすっぺ、出産祝いと一同の再会を祝って、本日は、弘志くんの奢りということで！
弘志　割り勘に決まってっぺ！
保子　いいばい、弘志くんたっぷり稼いでんだから！　カンパーイ！（と飲む）
弘志　妊婦が飲むんでねぇ！
保子　さすけねぇさすけねぇ、ビールまではさすけねぇ！　ほんとにみんな、あんがとない！　あんがとない！
弘志　ほんでおめたち、どーすんの、家のこと。

**間。**

弘志　こないだもうちさ電話かかってきて難儀したぞ。正成おんつぁん。……何だかおめ、息子の博満が遺産目当てで、役場の人に嘘吹き込んで、家まで取ろうとしてるとか、数穂姉ちゃんと裏でコソコソ連絡取り合っち条件吊り上げようとしてんだとか、わげのわがらねぇこと、妙に早口で……。やべんでねぇの、あの人？

博満　すみません。
弘志　ありゃ一人にしてちゃだめだよ。夕貴ちゃん、おめ東京からこっち、帰ってこらんにの。
博満　あのやろ。出鱈目ばっか言って。
弘志　おう、飲むか。
博満　いただきます。
弘志　（ビールを注ぎながら）実際、数穂姉ちゃんは何つってんの。
博満　いや、僕も何も聞いてねんです。電話も最近じゃ知り合いの葬式の連絡とか、そんくらいで。
弘志　何してんの、数穂姉ちゃん。男でもできたの。
保子　んなわけねーべ、よしてよ弘志くん。子供の前で。
……いやあたし、わがんのよ。数穂さんが出てっちゃったの。何となく。……事故があって、避難してみてさ、それまでみんな、あたしらはここでしか生きてけねんだ、この町からは出らんにんだって思ってたのよ。食堂なんかやってっと特にそうでしょ？　だけど、いざ出てみっと、思うのよ。……あれ？　なーんだ。意外と、生きてける。金さえあれば、生きてける。他にも、世界はあんだ……って、気づいちゃったのよ。数穂さんは。
わがんのよ、私も。はじめは別の町さ家建てるなんてゾッとした。だけんちょいざ建ててみっと、もう……家なのよ。そこが。わがる？　新しい家が、もう私の家で、そこで、生きる。生きてぐ。そんだけ。そうすっともう町さ戻るなんて考えらんねぇのね。もちろんふるさとは大事だし帰れんなら帰りたかった。だけんちょ、家はもっと大事なのよ。家と家族は。
弘志　んだなぁ。
保子　一番上の子でも覚えてないんだもん、震災前のこととか。あたしだけこだわっててもねぇ。
弘志　今、どこさいんの、数穂姉ちゃん。関西だっけか？
博満　わかんねぇんです。
弘志　でも俺、聞いたぞ。数穂姉ちゃんの同級生の人から、関西から絵葉書来たとか。
博満　うちには来てません。
弘志　数穂姉ちゃんもつらかったんだべなあ。正成さんがあんな、頭おかしくなって、年がら年中怒鳴り散らして。
博満　うちではそんなことねがったんですよ。ほんと。
弘志　裁判でもさ、あれだよ、東電さんに怒鳴ってただけでなくて、弁護士の先生にも怒鳴ってたんだってね。根回しが悪いだの弱腰だのっつって。女の弁護士の先生にだよ。
博満　親父が女の人、怒鳴るわけないですよ。
弘志　でも聞いたよ、俺、友達から。
保子　あんたたちが出てっちまって、そんで数穂さんが怒鳴られてたんでねぇの。
夕貴　んなわげねぇべ。保子ちゃん。あたしだって怒っかんね。

**間。**

保子　いいや。あだし、わがんのよ。……あんたたちが出てっちまったから、数穂さんのこと怒鳴ってたんだ。そういう人だよ。正成おんつぁんは。

夕貴　何、この人？
保子　帰ってこらんにの、夕貴ちゃん。こっち。……やだかんね、あだしや弘志くんが正成さんの面倒見させられんの。
夕貴　……。
保子　喫茶店なんて……若いうちはいいかもしんねけんちょ、１０年も２０年も続けるわけには行かねんだから。帰ってきたら？　どうせ子供できたらお店も一度は畳むことになんだから、こっち戻ってきて、いわきでも郡山でも、そこでやったら。
弘志　夕貴ちゃんな、悪い話ではねぇと思うよ。今は、福島は、悪くねぇから。移住するだけで１００万円近く支援金も出るし。店でも会社でも起業したら補助金も出るし。東京よりよっぽど儲かる場合もあっかんね。それにお店やんなら、結婚でも出産でも怪我でも病気でも、いざというとき親戚が近くにいた方が何かと助けっちくれっぱい。
夕貴　結婚するつもりもねぇがら。
弘志　（笑って）それな、みんな言うのよ、みんな。みんなよ？
保子　あんたね。ジジババどもが古臭いこと言って、あやまった……そう思ってんだろうけんちょ、違ぇのよ。私だって１０代２０代の頃は、家だの故郷だのちっとも考えねがった。だけんちょ３０代も後半になっと、どういうわけか、不思議なもんでねぇ。突然家とか故郷とか、気になるようになってくんの。妙に、気になんのよ。やっぱ私のルーツはここなんだな。逃れられねんだな。でもそれも、案外、悪ぃことじゃねんだなって。……これはねー、わかんねぇのよ、２０代のうちは。
夕貴　オレは戻らねぇ、悪いですけど。
保子　何で。
夕貴　したっけ、何でオレなの？　親父の面倒ならアニキがが見ればいいべ。
保子　（鼻で笑いながら）だっておめ、博満くんはもう結婚して……郡山の方で仕事もあんだから。
夕貴　オレだって東京に店があんです。
保子　でもお店、賃貸だべ。
夕貴　……は？
保子　解約できんだべ。それに家族がいるわけでねぇんだし。

**夕貴は立ち上がり、一礼して、立ち去る。**

保子　……はー……。何でわかんねぇかなぁ。
弘志　仕方ねぇ。まだ半人前だぁ。
保子　だけど実質、誰が正成さんの面倒見んの。
弘志　知るか。
保子　まだ６０だから若いけど。仕事やめた男は危ねんだ。すーぐ老け込むから。
弘志　（博満に）おめが今度、ちゃんと話して来。
博満　話しますけど。
弘志　ますけど何だ。

博満　オレばっか尻拭いで。親父もお袋も勝手ばっか……。

**弘志はビールのグラスを持つ。空であることにきづく。ほぼ無意識に、保子がビールを注ぐ。弘志はゆっくりビールを飲む。**

弘志　おめは、震災で家ぐちゃぐちゃにされて、そのまんま大学行って、就職して……だがらおめは高校生から11年半、すっ飛ばして家族やってる親子っつうわけだがら。だがら、ダメなのよ。10代の頃と同じでは。

家の権利はどうすっぺな。親父が病気したらどうすっぺな。保険はどこで、預金はどこで、万が一寝たきりにでもなったり、透析になったり胃ろうになったり人工肛門になったり、したらどうすっぺな。子供のオムツ替えんのと親父のオムツ替えんのとでは全く違えかんね。覚悟を決めっか、老人ホーム予約しとくか。

そういうことだぞ。家族っつうのは、もう。親父、俺、プロ野球選手になりたい、なんてことではもうねぇわけだから。だがらあの家に住むのか、壊すのか。売り払うかリフォームするか。それは誰が正成さんの、文字通り尻拭い、オムツ買えるかってことだから。

保子　弘志くんとこ、どうしてんの。

弘志　慣れたね。やってるよ。心を無にして。でもこれが10年20年続くのは無理だな。俺もアヤも……。

帰っか。あんがとない、付き合ってくれて。たまにはいいもんだばい、親戚同士、集まって飲むのも。昔はしょっちゅうやってたべえ、盆暮正月、食堂あさひのお座敷借り切って……。

お会計……。

保子　もう一杯飲むか？

弘志　飲むべ。

保子　泣いてもいいぞ。

弘志　泣かねぇよぉ、まさか……。熱燗2合！　すいません！　熱燗2合！

**と言って弘志は泣く。**

# 第五場　新居で話す

**めちゃくちゃ綺麗に整えられた正成の家のリビング。**
**正成がヒロミツを招き入れる。**

正成　（訛って）なんだおめ、遅かったな、入れ。まだちょっと……。
博満　お邪魔します。

**正成は、その挨拶に違和感を感じる。**

博満　……これ、お菓子。よかったら皆さんで。
正成　（訛らずに）……まだちょっと、片付いてなくてね。スリッパ、ご自由にどうぞ。……一緒じゃないの、ゆーは？
博満　車停めに行ってる。
正成　え。うちの裏、停めちゃってよかったのに。どうせ誰も来ないんだから。
博満　まぁ、一応。
正成　……昨夜はどこ泊まったの？　いわき？
博満　うん。
正成　保子んち？
博満　あー……いや、ビジネスホテル。
正成　もったいない。うち泊まればよかったのに。
博満　……飲んでたからさ。みんな。
正成　お昼食べた？
博満　あー……。
正成　簡単なもんなら作れるぞ。チャーハンとか、野菜炒めとか……。
博満　朝ごはん遅かったから。大丈夫。
正成　二日酔いか。
博満　まぁね。
正成　俺も呼べよな。次は。
博満　……まぁね。
正成　元気そうにしてた？　保子と弘志くん。
博満　うん。
正成　そうかぁ？　……果物剥くけど、何がいい。リンゴ、カキ……。
博満　いいよ、俺は。
正成　いや、夕貴と母さんの分も。ブドウもあるな。
博満　え？
正成　もらったんだ、今度越してきた、三件隣の……。
博満　いや。ブドウじゃなくて。

正成　何？
博満　……母さん来るの？
正成　……（少し笑って）は。来るに決まってっぺー。家のこと話すんだから。あそこ元々は向こうの土地なんだよ。母さんがいなきゃ、……どしたの。
博満　連絡とってたんだ？
正成　とってたよ、そりゃ。離婚したわけじゃないんだから。
博満　元気そう？
正成　あー……。
博満　何だよ。
正成　元気だろうな。
博満　何？
正成　基本、手紙なんだ。代理人さんの事務所通して。電話で声聞いたわけじゃないから、まぁね。
博満　そう。
正成　でも何も書いてなかったから。体調のこととかは。元気だろう、多分。
博満　うん。
正成　何かあったら書くだろ。そのこと。
博満　代理人って、弁護士？
正成　……風邪引いたくらいなら書かないかもしれないけど、まぁ怪我とか入院とかはなさそう。
博満　いや、そうじゃなくて。
正成　……土地とかお金の話だからさ。離婚とか、そういうんじゃない。
博満　本当に？

**正成、しばらく沈黙したのち、無言でこくりと頷く。**

**ピンポーン。**

**正成が迎えに出る。博満は、明らかに動揺したような表情を見せる。**

正成　（声のみ、訛って）おかえり。どこまで停め行ってたの。そこ停められっちのに。
夕貴　お邪魔します。
正成　（訛らずに）うん。さ、入って入って。

**正成が夕貴を連れて入ってくる。**

正成　スリッパ、ご自由にどうぞ。……さて、突然だけど、リンゴ、カキ、ブドウ、どれがいい？
夕貴　え？
正成　ヒロは何でもいいって言うから。夕貴が選びなさい。
夕貴　……私はいいよ。お腹空いてないし。
正成　……そうか。じゃあ、母さんが来てから剥くかな。リンゴにしよう。

**夕貴は「え？　来るの？」と驚くが、声には出さない。**

正成　ああ、あとこれ、……送ってもらったコーヒーの道具。何度か淹れてみたけど、全然違うね？　香りがすごいし、……飲みやすいし。甘い。コーヒー本来の甘味？　びっくりした。……これ綺麗に洗っておいたから、よかったらあとで淹れてよ。プロのコーヒー、飲んでみたいな。

夕貴　うん。

正成　広いだろ、キッチン。結構使いやすいよ。それから、ここ……このスペース、何だと思う？　多分、食洗機置けるようにしてあるんだと思うんだよな。母さん食洗機置きたがってたんだよ。前の家は狭くって置けなかったけど。

……この辺にテーブルでも置いて、コーヒーエリアにしてもいいなって。電動のミル置いたり、キャニスター置いたり。

**間。**

夕貴　コーヒー淹れようか、私。

正成　いいの？

夕貴　カップ、人数分出しといてくれる？

正成　用意してあるよ。

夕貴　じゃちょっと待ってて。エチオピアとケニア、どっちがいい？

正成　どっちでもいい。

夕貴　わかった。

**間。**

**居心地の悪そうな博満。**

**正成は傍から、三場で博満が濱田に渡したものと同じようなペーパーを取り出し、机に置く。**

正成　読んだよ、これ。エアーって読むのか、エーアイアールって読むのか、わからないけど。

博満　エーアイアール。

正成　正直言って、俺にはよくわがんね。

博満　うん。

正成　だから、まー、うーん……何とも言えねぇとこだけど、お前が本気でやってみたいって言うんなら、やってみてもいいかもな。

博満　……本当に？

正成　ただな、この、一階のカフェエリア。……できればここで食堂は再開してえから、この通りの間取りにはなんねかもしんね。この広さでは五人もお客来たら一杯だべ。だからこのな、展示エリアを、あの離れと納屋を壊すか直すかどうにかして、庭先に作るようにするとか……。二階はもう、好きにしていよ。オラたちはこの家に住めばいいから。

……いやホントはあっち戻りたかったけんちょ、ここもな、新しいし綺麗だし、案外悪くね

ぇなぁなんて思ってたのよ。最近。3部屋あっから、みんな個室が持てるし、オラはもうこのリビングが自分の部屋みたいんなっちまったから、部屋なんかいらねぇし。

博満　そんでな、もし食堂やるんなら、あれあるだろう、あれ、あの……ピッピで注文するやつ。タブレット？

正成　そう。あれ入れたいのよ。もうファミレスも居酒屋もみんなアレだべ？　知り合いに聞いたらイニシャルコストもそんなにかかんねぇの。ほんで、漫画置いて、そのタブレットも、漫画でも雑誌でもタダで読めるサービスがあっがら、それ入れて、ドリンクバー作って。……いや食堂あさひにドリンクバーなんつったら母ちゃんなんていうかわかんねぇけんちょ、前と同じようではいけねんではねーかと思って。前みたく、農家さんや工場さんの食堂じゃねぇ。町の人とか、観光客とか、おめの連れてきたアーティストのお客さんとか、そういう人たちがくつろげる、楽しめる、居場所がある、そういうとこにしねっきゃならねぇから……。どしたの。

博満　あぁ、いや……。

正成　やっぱ、変かな。うちみてぇな、田舎の食堂が……。

博満　そうじゃなくてさ。

正成　何。

博満　……。

正成　何よ。

博満　俺は。……住むつもりはないんだ。だから、部屋は……。

正成　そりゃいいのよ。奥さんもいんだし、郡山に住むに決まってっぺ。だけんちょ子供部屋残しとく家だっていっぱいあっぺ。キミエさんとこなんかそうだよ。ほんで子供が奥さんと家族連れて、たまに帰ってきて、泊まったりすんの。あれでいいんだ。ああいうんで。子どもはいずれ、出て行くんだから……。

**間。**

正成　そうだよ。むしろ、そうなんだよ。子どもはいずれ出ていく。そうでねば困る。だけんちょおめは、震災のとき高3で、おめは中3で、避難だの進学だの引っ越しだの、あと俺が入院だのしてるうちに、気づいたらいなくなってた。卒業式も入学式も成人式もやってねぇから、何が何だかわかんねぇうちに出てっちまって。それはさ、親として……。

**間。**

**夕貴が黙って、三人分のコーヒーを出す。**

正成　母さんの分は。

夕貴　来たら出すよ。

正成　もう来るよ。（時計を見て）渋滞してた？

夕貴　いや……。

正成　電話してみるか。（とスマホを取り出す）
博満　来ないよ、母さんは。
正成　来るよ。
博満　もう三十分も経ってる。来るわけない。
正成　事故にでもあってなきゃいいが。
博満　父さん、もう、ダメなんだよ。やめよう。
正成　今に来る。今に。もうすぐインターホンが鳴る。すぐだよ。
博満　そんなの、絶対……。

**ピンポーン。**

正成　……ほらな？
博満　……。
夕貴　私出るよ。（と慌てて玄関に向かう）
博満　（椅子を立ち、口元を手で押さえる。落ち着かない様子）
正成　普通にしてればいい。いつも通り。（咳払いを一つ）ウン……。
夕貴　母ちゃん！

**夕貴が「ガチャ」とドアを開けると、そこには、犬を連れて、変なサングラスをかけた、何か変なおじさんが立っている。**

初老男　いやいやいや、わりぃない、遅れて。ニーパッパえらい渋滞でな。あ、これ……あんぽ柿。モリノさんとこのばさまがこないだのお礼にって。（夕貴の顔を見て）お孫さんかな？
夕貴　お父さん？
初老男　いやしかし冷えんね。もうだめなのよ、五度下回っと、リウマチがシクシク痛んで……。
夕貴　こちらの方……？
正成　誰ですかあなた。
初老男　あれ。誰あんた？　ここどこ？
正成　鴫田です。
初老男　……あらやんだ！　後藤さんちでねぇの！　こりゃまた失礼しました。あれ？　ここだと思ったんだけんちょ……。ごめんねぇ！　お騒がせして！
正成　いえ……。

**サングラスのおじさんは出ていく。**
**重たい空気が流れる。間。**

博満　……母さんは来ないよ。さっきもＬＩＮＥ送ったけど、
正成　既読がつかないんだろ。運転中だから。
博満　……逆だよ。既読がついたけど、返事がない。

正成　……運転中だから、見ただけで、返信はまだ、
博満　……無視されてるんだよ。会いたくないんだろうね、今はまだ。
正成　来る方向で検討するって言ってた。
博満　だったらこんなに遅れる？　連絡もなしに……。
正成　やっぱり、電話、
博満　俺だって今日来るのが怖かった。夕貴もそうだろ。俺たちは、もう、家族じゃない。ごめん。
　　こんなこと言うつもりなかったんだ、俺も。でも、
正成　繋がらないな。
博満　やめろよ。
正成　入るかどうか迷ってるのかもしれない。すぐそこ、ドアの外にいて……インターホンを押すの、ためらってるのかもしれない。
博満　そんなわけ、

**博満の携帯から「ピローン」と音がする。博満は驚いてそれを見る。**

博満　……スタンプだ。
正成　何て？
博満　「待たせてゴメンネ」。

**一同、驚いてお互い、顔を見合わせる。**
**ピンポーン。全員、息を止める。**
**一瞬の間の後、**

正成　夕貴！
夕貴　うん。

**夕貴が「ガチャ」とドアを開ける。**
**すると、……またさっきのあのサングラスの変なおじさんがいる。**

初老男　いやわりいない、遅れて。さっき間違って違う家さ入っちゃって、あやまったー。ごめんね、ごめんね！　これモリノさんとこのあんぽ柿、今年のは出来が良くって、甘ぇのよぉ、こでらんにぞ！
夕貴　二度と来ないで下さい。

**夕貴は「ガチャとドアを閉める。**

夕貴　来ないんだよ。
正成　もう少し待とう。

夕貴　今さら話し合おうなんて遅いよ。みんなもう新しい生活がある。この町には戻れない。

正成　何で母さんが出てったのか。……俺の看病が大変だったからか。俺が裁判で、怒鳴ったりするから、そのことで……町の人から何か言われた？　他に何か、やりたいことができた。他に好きな人ができた。

夕貴　……。

正成　わかんねぇのよ。全然。けど、母さんは何も言わずにいなくなるような人か？　違う。知ってんだろ？　今日だけは会って話したいって、言った。正直、離婚の話もした。別れんなら、その話もしようって。家、壊すんなら、それも話そう。でも会って話したい。会わねばわからねえ。何も。文字だけじゃわがんね。最後なら会って話そうって、言ったんだよ。それでも、来ねぇかな？

夕貴　ちゃんと母ちゃんに、謝れる？

正成　……謝るよ。謝らして、くれんなら……。

**夕貴、黙って椅子に座る。**

正成　どんなことがあっても、落ち着いて話すつもりだ。

夕貴　うん。

正成　おらがおかしなこと言いそうになったら、止めろよ。

夕貴　もちろんだ。

**博満も椅子に座る。**

**三人の目線が合う。**

**間。**

**正成は、二人に深々と頭を下げる。**

**博満は首を横に振り、ぐっと肩を握る。**

博満　最後まで話し合おう。

夕貴　うん。

**ピンポーン。チャイムの音が鳴る。**

**博満と夕貴は、今度は驚かず、何かを覚悟したような面持ちでお互いを見る。**

**夕貴が無言で腰を浮かそうとすると、**

正成　いや。……おらが出るよ。……座って待ってて。

**正成が、迎えに出る。**

**ドアの前で立ち止まり、大きく息を吸って、ドア開ける。**

**ガチャリ。**

**またあの男がいる。**

初老男　……あの、やっぱし、何度住所見てもこごで……。

正成　帰れよ！

初老　いやでもこご、Ｃの１でねえの？

正成　Ｃの１だよ！　帰れ！

初老　え、じゃあやっぱ、後藤さんでねぇの？

正成　うちは鴫田！　警察呼ぶぞ！　ボケジジイ！　帰れ！　ふざけてんでねー！

**バタン。**

**鴫田はそこにへたり込む。**

鴫田　……冗談でねぇぞ。おらたちの気も知らねで。ふざけたこどばっか……。１１年半。でたらめなことばっか……。おらたちがわりいことしたんなら仕方がねえ。殺せ。牢屋に入れろ。だけんちょおらたちが何をした。何でこんな仕打ちを受けなきゃなんね。バラバラにされて。家も、仕事も、家族も取り上げられて……。あー！！

**鴫田は床を叩く。**

**間。**

**ピンポーン。**

正成　あのジジイ。

女の声　ごめんくださーい。

**間。**

**その声が誰なのかわかって、家族は驚く。**

**鴫田は、そ事実を受け入れ、泣き出す。**

**博満が鴫田のところへしゃがみ、肩をぽんぽんと叩く。**

**博満が意を決してドアを開ける。弁護士の尾形が立っている。**

尾形　（深々と一礼し）遅くなりまして大変申し訳ありません。数穂さんの代理人をしております、弁護士の尾形と申します。……息子さんでいらっしゃいますか？

博満　はい。……中（どうぞ）。

尾形　いえ。……大変申し訳ないのですが、数穂さんは来れなくなりました。

博満　……どうして。

尾形　来られなくなりました。

博満　だから、どうして。

尾形　申し訳ありませんが、それ以上のことは。

博満　言えない？
尾形　申し訳ありません。
博満　本人の希望ですか。
尾形　お話できません。……（封筒を差し出し）こちら、封書にて三通、書類をお持ちしました。あの家はやはり、取り壊したいとのご意向です。後ほどご覧下さい。
博満　あそこは俺たちの家だぞ。
尾形　名義人は数穂さんです。
博満　勝手に決めんのかよ、母さんは。
尾形　来年夏の期限までに話し合いを重ねていきたいとご希望されております。しかし、今日はちょっと、一身上の都合で、お会いするのは難しく……。

**間。**

尾形　それでは、失礼致します。お時間に遅れましたこと、心よりお詫び申し上げます。

**尾形は去る。**

**間。**

夕貴　帰ろうか。
博満　あぁ。
夕貴　また来よう。今日はもう帰ろう。
博満　そうだな。

**間。**

夕貴　母ちゃんはこれだから。いっつも、急に、気が変わんの。
博満　いや。お袋は、約束は絶対に破らないよ。
夕貴　気分屋だから。
博満　決めてたんじゃないかな。随分前から。
夕貴　行こう。
博満　うん。

**間。**

**博満はテーブルに近づき、封書を置く。**

博満　これからなんじゃない？　これから話し合っていくんじゃない？
　……開けてみる？　何だろう、手紙かな。書類？
夕貴　私はもう行くよ。（正成に）コーヒー、飲んでね。

正成　開けてみようか。
博満　うん。

**博満はテーブルに座る。**
**正成はコーヒーを飲む。**
**夕貴の顔を見る。**

正成　同じ豆だよな？
夕貴　そうだよ。
正成　全然違うんだな。ゆーちゃんが淹れると……。
夕貴　……そうだよ。
博満　……開けてみよう。いい？

**二人は頷く。**
**終わり。**

# 他、短編

## 高校の校庭

……見て下さい、この校庭。わかりますか？　……広いでしょう？　ねえ。普通の学校の、そうですねえ、2倍か3倍はあるように見えますよねえ。この辺りの地域ではスポーツが盛んだったんですね。もともと盛んでしたけど、原発ができてからもっと、大きな体育館、大きな練習場、練習施設……。中学校の体育館に、ベンチプレスだのアームカールだのルームランナーだの、ジムのマシン、一式揃ってました。

……改めて、もう一度、見て下さい、この校庭。……何かに気がつきませんか？　……そうです。草でぼうぼうですねえ。ほとんど地面が見えないくらいです。こんなに立派な校庭なのに、人間の背丈より高い草が、もちろんこの11年でのことです。あれはセイタカアワダチソウです。外来種です。あまりの繁殖力の高さから、侵略的外来種とも呼ばれますが、あの広い校庭を覆い尽くしています。私たちの小さい頃は、ああいうものはなかった。

……もう一度校庭をご覧下さい。私たちが学生の頃は、この校庭はそれは綺麗なもので、雑草の一本も生えていませんでした。なぜか？　そうです。運動部がみんなで、整備させられてたからです。私は野球部だったんですが、当時はそりゃあもう厳しくてね。水は飲むな！　休憩中、水を飲むと怒られたんですよ、当時は。だからみんなで、ランニングのときこっそり、そこの……見えますか、あの川の草の陰に隠れて、水をガブガブ飲みました。……それからあそこ。あの、木の茂ってる高台の、さらに上のあたり。前はあそこに大きな山があって、「天王山」なんて呼ばれてたんです。エラーなんかすると「天王山行ってこい！」「ハイ！」、それで、ダッシュで往復ですよ。とにかく厳しかった。

……そうです。私が高校生だったのは、今からだいたい50年くらい前ですから、原発ができたのは、ちょうどその頃です。すべてが様変わりしました。まず川で、水が飲めなくなりました。当時は工場の廃水なんて全て垂れ流しですから、原発ができて、川の水がすっかり泡立ってしまって。もう飲む気にはなれません。これは辛かった。水は飲むな！　そう言われてもこっそり飲んでたのが、もう飲めなくなっちゃった。それから天王山は、なくなっちゃいました。東電さんの社宅ができるとかで、あの小さな山は切り崩されてしまって。これは、逆にラッキーでした。天王山ダッシュがなくなったんですからね。

それから春夏の大会。東電さんから寄付金があって、毎年、大きなバスが出るようになりました。そんで、学校総出で応援に行くようになりまして。これは嬉しかった。誇らしかったですね。それで僕たちの学校がホームラン打って、買ったりすると、地元の新聞なんかには必ずこう書かれたもんです。「アトム打線爆発！」……わかりますね？　アトム、つまり原子力ですね、鉄腕アトム……。だから地元の高校野球がホームラン打つと、「アトム打線爆発！」。時代ですね。

他にもたくさんありましたよ。アトム観光とかいう観光業者とか、アトムクリーニングとか、アトム寿司なんてのもありましたよね、回転寿司のお寿司屋さんで。アトム寿司は今でも残ってますよ、富岡の方に。アトム観光もまだあったんじゃないかな……。どうでしょう。私はもう、この辺には住んでいないので、よくわかりませんが。

当時は工業科なら、みんな東電に行きたがりました。東電が一位。うちは普通科でしたから違いましたけど。憧れたもんです。東電に行ったやつが、一番最初に車を買って。一番最初に結婚して。一番最初に家を建てて。女の子はみんな東電さんとこにお嫁に行きたがって……。そういう時代ですねえ。

……そして、もう一度見て下さい、この広い校庭。１１年半経って、まだ一切、除染されていません。除染、できないんです。何億円ってかかりますから。大体、家一軒、民家一軒、除染するのに一億円かかるんだそうです。普通の家、一つ除染するのに一億円です。だからこの、広い校庭……もしかしたら何億円じゃきかないかもしれませんね、１０億、２０億。だけど、何の使い道も決まってないのに、そんなお金、使えませんよね。だからほったらかしです。次の使い道が決まるまで、後回しなんですねえ。だからここは、１１年半も経って、草がぼうぼう、除染もまだ。

……ええ、思い出しますねえ、高校生の頃。昔は本当にきれいな、草一本ない校庭だったんですよ。

さて、それじゃあ次は、海の方を見に行きましょうか。……

# 子供の声

双葉町への引っ越し初日の朝、大量の取材を受けた。福島民報、福島民友、河北新報といった地元紙すべて、全国紙も2社ほど、テレビもＮＨＫや地元テレビ局だけでなく、中国とドイツからも依頼があった。ウェブメディアもいくつか来ていた。

取材はありがたかったが、朝から晩まで同じ質問を何度も受けて疲れていた。そんな中、こんな問い合わせもあった。

「谷さん、お引っ越しおめでとうございます。マルバツ新聞のオザキです。今日の夕方はご在宅でしょうか？」

「取材ですか？」

「ああいえ、取材はまた後日、改めて正式に。今日はご挨拶だけでも伺えれば！」

「ご挨拶だなんて、そんな、結構ですよ」

「いえいえ、ご迷惑でなければ行かせて下さい。ご近所ですし！　どうでしょう？」

ぶっちゃけると迷惑だったが、迷惑だなんて言えるわけない。苦笑いしつつ申し出を受け入れた。オザキさん、なかなか押しが強い。多分、サッカー部かバスケ部だったんだろう。そして夕方、オザキさんから再度連絡があった。

「谷さん、間もなく到着します！　ちょっと今日、急遽子供を見てないといけなくて、お邪魔でなければうちの息子も連れて行こうと思うんですが。どうでしょう？」

ぶっちゃけると邪魔だったが、邪魔だなんて言えるわけない。ぜひ来て下さいと迎え入れた。オザキさん、やはり推しが強い。きっとパリピなんだろう。そしてオザキさんは息子を連れて到着した。6歳の息子・タカシくん（仮名）は偶然にも同い年だったうちの息子・オウタと意気投合し、家の前を所狭しと駆け回り始めた。

「行くぞー！」

「捕まえてみろー！」

「負けるかー！」

「こっちの方が早いぞー！」

「キャー！」

「アハハハー！」

「うんこー！」

そんな子供らの鬼ごっこにオザキさんが加わった。サッカー部でパリピの大人の乱入に、子供たちは大喜びだ。

「行くぞ、ウオー！」
「キャー！」
「待て待て、ガオー！」
「逃げろー！」
「捕まえたぞー！」
「バリアー！」「うんこバリアー！」
「ギャー、やられたー！」
「キャー、逃げろー！」
「待て待てー！」

日が傾き、空はもう真っ赤だ。息を切らしたオザキさんが子供たちから離れ、僕の隣へ来た。「子供ってのは本当に元気なもんですね」と僕が言う。「本当にね」とオザキさんが返す。「子供を見てないといけなくなって、って言ってましたが、奥さんお仕事か何かですか」と僕が尋ねる。「いえ妻は、実は病気で亡くなりまして」とオザキさんが返す。僕は慌てて謝る。オザキさんは「構いませんよ」とかす。子供らはそんなことお構いなしに追いかけっこを続けている。しかし僕とオザキさんの間に流れる空気はもう少し、確実に変わってしまった。それを察してオザキさんが静かに話し始める。

……僕たち以外、本当に誰もいませんね。それでもこうして、今日からはここに、人が住んでいる……っていうのは、すごいなあと思いますよ。感動します。……僕もこの辺りに引っ越して、取材をして長いですが、まさかここで子供らの遊ぶ声が聞こえるなんて、思いもよらなかった。……見て下さい、あいつら（笑う）。子供ってのは早いです、もう友達だ。タカシも良かったなぁ、同い年の友達ができて。

……谷さん、もしかしたらこれ、本当に、11年半ぶりかもしれませんよ。僕たちだけじゃなくて、11年半ぶりにこの町は、子供の遊ぶ声を聞いたのかもしれません。あんなに元気な……。

耳を澄ますと、元気の全く衰えない子供たちの声が聞こえてくる。

「うんこー！」
「うんこバリアー！」
「うんこうんこうんこー！」
「キャハハハー！」

これがこの町が、11年半ぶりに聞いた子供たちの遊ぶ声だ。

「うんこうんこうんこー！」
「キャハハハー！」

# 朝

朝が来ると、太陽がやってきて海岸線を染める。まず紫、次にオレンジ、赤。夜をうろついていたタヌキやハクビシンは、草むらに身をひそめる。遮るもののない広い空が、青一色に染まる。

朝が来ると、遠くまで見えるようになる。遠く、遠く……冷たい空気の中を、一人の老婆が歩いてくる。カーディガンを一枚羽織って、一歩ずつ。一歩ずつ。

朝が来ると、何の音も聞こえない。夜、部屋の中は賑やかだった。ウーとうなるエアコンの音。ヴーンと震える冷蔵庫の音。ヒーターの音。でも朝の散歩では何も聞こえない。

老婆は立ち止まり、耳を澄ます。こんな朝は、80年間この町を生きてきて初めてだ。こんなに静かなことがあるだろうか？　いくら田舎の町っつっても、昔は、朝は、いろんな音がしたもんです。煮炊きの音、新聞配達の音、朝早く出かける人の音。昔は……。

そういえば昔、かくれんぼをしていて、探しても探してもだーれも見つからなくって、世界中から人がいなくなってしまったんじゃないか！　……そんなこと、考えたことあった。世界中、人が、一人もいない……。

朝が来ると、老婆は毎朝、散歩をする。彼女のかかとが、町に一つだけの音が聞こえる。

# 住民懇談会

壁の大きなデジタル時計が１０：００に変わった。司会の男が話し始めた。

「お時間になりました。ただいまより、住民懇談会を始めさせて頂きます」

おしゃべりをしていたおばあさんたちのグループが静かになる。会場に集まった６０人ほどの男女、９割以上が６０代以上だ、全員がまるで一つの生き物になったように、じっ……と前を見つめる。司会の男は妙ににこやかに話す。

「本日は、貴重な機会を頂き、誠にありがとうございます。皆様の声をしっかりと受け止めて参りたいと、職員一同、考えさせて頂いております。まずはじめに、T本部長からご挨拶をさせて頂きます」

司会の男の言葉も、その後に話す本部長の言葉も、ほとんどすべて「させて頂く」で終わる。お話させて頂く。ご説明させて頂く。努力・検討させて頂く。住民たちは頷いたり微笑み返したりすることはなく、じっと前を見つめ続けている。やはりそれは大きな一つの生き物のような印象を与える。獲物に飛び掛かるチャンスを探ろうとして、じっと息を殺している。

行政からの説明が２０分ほどで終わり、司会の男がまた妙ににこやかな話し方で切り出した、

「それでは皆様から、ご質問を承らせて頂きます」

６人の男が一斉に手を挙げた。「では、一番前の方から」。若い職員がマイクを持って駆けつける。男は会釈一つせず話し始めた。

「××地区のイワノです。この懇談会、やる意味ないですよ。今の説明、前回伝えた内容が全く反映されてないじゃないか。意見を聞くって言うけど、聞くだけなら意味がない。子供でもできます。サルでもできる。

隣の地区は除染されて、帰還できるようになった。なぜうちは除染もされず、帰還もできないのか。なぜです。説明できますか？

そもそも話の順序が違う。『帰るつもりがありますか？』、そんなこと訊かないで下さい。『除染しました』『戻れます』、それから訊いて下さい。なぜ掃除も後片付けもしないうちに『帰りますか』『それとも家を壊しますか』なんて訊くんです。あなたは人んちでコーヒーこぼしたとき、掃除しないで帰りますか？　ゴミ、散らかしたまま帰りますか？　違うでしょう。まずは除染。帰るかどうか、訊くのはその後」

男が突然マイクを置いたので「ゴン」という音が会場中に響いた。スーツ姿の行政職員たちが「誰

がこの質問に答える?」「町か、政府か」、うろたえていると、男はもう一度マイクを握って立ち上がった。

「これは質問ではなくて要望です。ですから答弁不要！」

司会の男は、こんな時でもにこやかに答える。

「ありがとうございました。頂いたご要望は、持ち帰り検討させて頂きます。それでは、次の方……」

またすぐ5本の手が上がる。次の男はぼそぼそと、消え入るようなトーンで喋る。

「１１年前、あのときは、すぐ帰るというつもりで避難しました。今、私の家では、庭の真ん中に生えてきた木が、電信柱と背ぇ比べをしています。家の中は動物、イノシシだとか、ハクビシン、タヌキ、カモシカに踏み荒らされてめちゃめちゃ。あんな家に帰りたい人はいません。

いつ、戻して頂けるんでしょう？　うちの地区ではもう震災後、５０人が他界しました。私は８０になりました。生きてるうちに町に帰りたい。ふるさとの水を飲んで、自分の家の床で死にたい。自分の墓に入りたい。それだけです。いつ、戻れるのか。聞かせて下さい」

行政職員がまず質問への感謝を述べた後、おずおずと説明を始める。

「現時点では私ども、１００％お答えできる回答を持ち合わせておりませんが……」

すると会場の別の一角から突如、大声が上がる。

「ほんなら、なんで説明会なんかやんだ！　答えもねぇのに、なんで集まって話さねっきゃなんねんだ！　我々なんぼ暇だからって、おめぇ、中身のねぇ集まりに集められて、何説明すんの。何！　なんで答えもねぇのに集められてんの、我々！」

行政職員が答える。

「申し訳ございません。私の説明が悪かったです。お答えできる範囲でしっかり、」

また男が遮る。

「やんの！　やんねぇの！　どっち！」

「それはもう、まさにですね、ゆくゆくはすべての地域を除染し、皆様一人残らず帰れるようにする。この方針にブレはありません。総理大臣もそう言っているのでありまして、」

「ゆくゆくっていつだ！」

「私どもも日々朽ちていく家々を目にして胸を痛めており、必ず前に進める、そういう気持ちで、」

「あんたのお気持ちはどうでもいい！　……あんたたちは加害者だ。加害者の気持ちなんかどうでもいい。ほんとに責任、感じてんなら、全域除染！」

「責任を感じているからこそ、今ここで軽々しくお約束しては、進められるものも進められなくなってしまうのでありまして、」

「我々を脅すのか！」

「私どもも、総理大臣以下、関係各省、そして我々自身、現場に赴き、様々な声を受け止める中で、何ができるかあがいています。つい先日、復興拠点外のおばあちゃんからお手紙を頂きました。この10年で夫に先立たれ、田畑も失い、体も悪くした。帰っても何もすることがない。しかし、帰りたい。その一心。その思いを、受けて止めているからこそ、早く帰りたいという意思をすでにお示し頂いている方から順番に除染に当たらせて頂くというのが、一番の近道だと考えさせて頂いておるわけでして、」

「長い！」

「……申し訳ありません！」

「具体的にどうすんの」

「具体的な進め方につきましては、本日冒頭、ご説明差し上げました大きな方針に則り、町と相談しながら一つ一つ、」

「副町長、よーく聞いとけ。今言ったな、『具体的に進めていく』。聞いたな？」

しばらく混沌が続いた。やがて司会の男のにこやかな声が「大変恐れ入りますが、他の方からのご質問もございますので……」と流れを断ち切り、次の質問者がマイクを握った。茶色いウールのセーターを着た、小綺麗な老人だった。

「あなた方はどうせ、2年か3年かで転属になって別の部署に行く。

私たちの、ふるさとへの想いはわからない。

あなた方はどうせ、ローンを組んで、マイホームを買うだけ。
私たちのふるさとは、私たちの祖父や曽祖父が、苦労して手作業で開墾した。住むところも食べるものもない荒野を切り開いて、何十年もかけて作った。それが私たちのふるさとです。
――その想いは、あなた方にはわからない。そのことを忘れないで欲しい」

今度は小柄なおばあさんが質問した。

「今日も、何だか、わかるようなわからないような話ばかりで、私にはよくわかりません。でも……。私はもう、この年ですから、帰れるとは思っていません。それに、こないだ様子を見に行きました。うちの、綺麗だった畑だって、もう山でした。隣近所も誰も帰っていません。私は、誰もいないところには、帰りません。
１００年かかっても、２００年かかっても、必ず除染しますというのなら、私は我慢してあの世へ行きます。お約束して頂けますか。必ずやると、お約束して頂けますでしょうか」

Ｔ本部長は、無機質なトーンでこう答えた。

「総理大臣が、必ずやると、このようにお約束しました。ということは、これはすなわち、必ずやるということです」

司会の男が、壁の大きなデジタル時計を見て、こう言った。

「大変恐れ入りますが、お時間となりました。以上で、本日の住民懇談会を終了とさせて頂きます。駐車場での事故が大変増えております。お帰りの際は、お気をつけてお帰り下さいませ」

（その声は最後までにこやかだ）

# この町のいいところ

（政府集計アンケート：「語り継ぎたいこの町の暮らし」より）

空気がいいところ。暑くもなく、寒くもない。冬にあまり雪が降らない。夏は外で葉たばこを乾かす。浜風があって涼しい。空が広い。夜は星空。朝の空の、刻々と変化する色。地区ごとの花火大会、盆踊り。秋は紅葉、目も覚めるようなモミジの赤、カエデの赤、黄金のイチョウ。帰りたい！　お花見。芋煮会。

海からは山が見える。山からは海が見える。広い海岸線。日本の海水浴場100選にも選ばれた。海の家。その前には海まで0秒のキャンプ場。海浜キャンプ最高！　サーフィン。海釣り。イシモチ、アイナメ、タラ、シラウオ。アワビ、ウニ、カキ。帰りたい。

山にはカブトムシがいっぱい。クワガタもいっぱい。きのこがたくさん。山菜もたくさん、タラボ、コゴミ、ゼンマイ、ワラビ、ウド、シドケ、フキノトウ。カラスと喋れる友達がいた。

川にはヤマメ、カジカ、イワナ。ドジョウ、フナ、上流にはたまにサンショウウオ。夏はホタル。シャケがたくさんとれた。シャケ？　それは密猟では？　帰りたい！

子供も大人もあいさつ、おはようございます。こんにちは。こんばんは。おばんです。小さな町なのでまとまる力が強い。その分、近所づきあいはだるい。お散歩。少し歩けばすぐ友達に会える。明るい子供たち。牛。友だちが近くにいる。近所の人と会話がある。

隣近所から野菜がどんどん届く。トマト、キュウリ、トウモロコシ、ホウレンソウ。モモ、ナシ、リンゴ。トマトのジャム、ヤギのミルクのアイスクリーム。食べきれない。湧き水でワサビを育てて、有機農業、自給自足、米作り。未だにうちの風呂は薪で沸かしていた。ミネラルウォーターを買わなくても、井戸水がおいしかった。

町のあちこちに農産物の直売所とか無人販売があって、野菜、果物、あとそこんちのお母さんが作った柏餅、おやき。自分ちの庭で家庭菜園。家と家が離れてるから、飼い犬がいくら吠えても苦情が来ない。映画館がない。本屋がない。でも気軽に楽器が吹けた。花をたくさん植えた。駐車場代がかからなかった。帰りたい。鍵掛け、戸締まり、しなくても泥棒が入らない。猫ものびのび。牛ものんびり。朝夕の潮騒の音。

田舎に帰ると元気になる。海が見えるとほっとする。先日母の納骨を済ませた。最後に母が言った、あの頃は毎日孫たちと一緒にいられた。何もない町。でもそれが良かった。私はあの町が好きだった。今の町を見ても、以前の町は浮かばない。帰りたい。

帰りたい。帰りたい　だけど私は帰らない